

⑤2 海外での挑戦  
 昨年の2月、本コラムで「パラオ共和国(以下パラオ)の子どもたちに理科実験をしたい」と宣言しました。当時は何のコネクションもありませんでした。しかし、日本とパラオの外交関係樹立30周年というタイミングもあり、パラオ日本大使館から支援を得て、先月、パラオで理科の授業を実施することができました。



写真①が展示されています。当時、私は吉本新喜劇団員で海外進出が成功であったことをテレビのニュースで知りました。「言葉の壁を超える新喜劇の笑いは世界でも通用する」。普段一緒に舞台に立っている先輩方の活躍が誇ら

しく、「いつか自分も海外の舞台に立ちたい」という思いが生まれました。しかし、それは実現しな

いままを引退...  
 現在は、大学教員として「誰もが楽しめる新喜劇」の実践をしています。海外に挑戦した先輩への憧れがずっとありました。

そして、形は変わりましたが、「海外の舞台に立ちたい」という思いは、パラオのサイエンスショー「ムリ」のようにパラオ語の

また、日本と深いつながりのあるパラオでは「ゴメン」「タノシイ」のようにパラオ語の



写真②

1000語近くが日本語由来の言葉であり、同様に日本の歌を子どもたちは歌うことができます。そこで「音」の実験では、空気を

利用したペットボトルの楽器をつくり、「はとぼっぼ」をみんなで歌いました。

さらに、1人で一つの実験ができるように全員の道具を用意するなど、できる限り子どもたちが主体的に参加できるように工夫しました。その結果、人生初のスタンディングオベーションをいただくなど授業は大盛り上がり!

新喜劇のようにお笑いで盛り上げることはできませんでしたが、楽しく学ぶ授業で子ども達を笑顔にすることはできました。早速、来年の依頼もいただけたので、次回パラオの子どもをもっともっと笑顔にしたいと思います。